

# はじめに

巷の言説によると、最近の若者は「コスパや効率を重視し、すぐに答えを知りたい」傾向があるらしい。インターネットの発展により、あらゆる情報へのアクセスが容易になった昨今、疑問に対するとりあえずの解答が、(正しいかどうかはともかく)非常に得やすい時代になった。そんな背景があれば、自分で試行錯誤することを非効率と考えるのはもっともな話である。よくよく考えてみればコスパや効率を重視することは全く悪いことではないはずなのに、若手のスタッフにはつつい「そんな短絡的に答えを求めてはいけない。評価から仮説を立てて、その検証を行う臨床推論をくり返すことが自己の成長のためにも大切なんだ」などと説教を始めてしまう。もちろん、それは正しい。How toではなく、Why・Whatを試行錯誤することで臨床力が磨かれていくことは間違いない。しかし、そのような内容の研修や書籍で膨大な情報に触れた後、なんだかすごく勉強になったような気がするものの、いざ実践の場に立つと「で、結局どうしたらいいの?」という疑問に直面するのである。

## 本書の特徴・狙い

本書は、初めて脊椎疾患のリハビリテーションに従事する、経験年数1~3年程度のセラピストにペルソナを設定し企画した。

前述の通り、初学者が行き詰まるのは多くの場合How to、つまり「何をすればいいのか?」である。学術的な情報を多分に盛り込んだ内容は既存の書籍で十分になされていると判断し、やや情報密度が薄くキャッチーな内容に寄ることを許容する代わりに、How toを忌避しない、臨床への転移がしやすいものを目指した。執筆には、文献的な根拠をベースにしつつも臨床の思考過程や経験知などを書き下ろすことができる先生方を迎え、学んだ知識を臨床で用いるイメージがつきやすいよう構成に工夫をいただいた。

学びは実践の先にこそある。学んだ知識を総動員して実践し、それだけでは手も足も出ないことがわかってはじめて、より深い学びの必要性を実感できる。脊椎のリハビリテーションにおいて、初学者が最短距離で実践にとり組み、その先にある学びに向かうための、まさしく入門書としての役割を本書が担うことができれば幸いである。

2024年5月

医療法人全医会あいちせほね病院リハビリテーション部  
河重俊一郎